

S・C・ジャー著

『インドにおける  
資本主義の発展』Shava Chandra Jha, *Studies in the Development of Capitalism in India*, Calcutta, Firma K. L. Mukhopadhyay, 1963, 415 p.

## I

kongress・パーティは1955年の Avadi 大会で「社会主義型社会」の実現を決議し、これをよりどころに政府は第2次5カ年計画を策定、施行した。1957年の大会で「社会主義的協同組合のコモンウェルス」の実現を政策目標に掲げたのち、1964年の Bhubaneswar 大会は「民主社会主義」のイデオロギー的指導の下に、インドを「社会主義社会」へと押し進めるべく決議した。しかし皮肉にも、1956年以降、民間資本の急増とその集中が著しく、インドは資本主義的経済発展の道を歩んでいることが明らかである。前国防相 K. Menon など kongress 左派の指摘するごとく、インドは資本主義社会であることを認めねばなるまい。

農地改革など一連の社会改革の失敗のため、インドでは都市と農村の基底に根強い封建的・半封建的諸要素を温存しながら、その基盤の上に、資本主義が外国資本と国営企業・国家金融の2本柱に支えられながら発達しつつある。

## II

インド資本主義は、いつから、いかなる道をへて生まれ育ってきたのか。

著者 S. C. Jha は1950年代前半にアメリカ留学中、「封建制から資本制への移行」に関する例のドップ=スウィーギー論争にふれ、インドの資本主義がいかんして発展したかについて大きな関心をもった。これを契機に、マルクスが『資本論』で展開した「資本主義発展の二つの道」（第3部第20章）に関する研究に関心をいだいた。これらの成果をふまえて、著者はインド資本主義の発展過程を本書でつぎのように要約する。

(1) 土地の共同体所有という特異な条件下に成立したインドの封建制は、14~15世紀ごろから弛緩しはじめた。これは、商品流通拡大に伴い、より多くの歳入を求める

領主の衝動が上から村落共同体の厚い壁をゆるがすとともに、他方では下層の商人・手工業者を中心とする Bhakti Movement が西欧の宗教改革、ルネッサンスにおけるように、わずかながらも下から村落共同体の厚い壁をゆるがしたためである。後者の経済的基底には、村落共同体内に生まれ、そのわくをはみだしはじめるまでに成長したかなり広範な商人・手工業者の層があった。

(2) 15~16世紀になると karkhanas と呼ばれる作業場が出現する。手工業者出身の企業家——かれらは自ら働きながら、他方では他の手工業者を雇用する——の経営する作業場が発生し karkhanas 間の分業が発達し、中世的な職種のギルド規制から自由な社会階層が生まれる。すなわち、イングランド型の資本主義発展の第1の道——真に革命的な道——の素地が準備される。

他方では、王立 karkhanas の設立のほか、特許状をもつ一部の企業家は大商人となり、零細手工業者に資金を前貸ししたり原材料を貸し付けたりして、その対価に製品を受け取り、これを国内の大市場または外国市場で販売するという問屋制的形態もやや遅れて発生する。すなわち、商人層が直接生産過程を支配するという資本主義発展の第2の道の可能性もでてくる。

(3) もし、イギリスの侵入がなかったならば、インド資本主義がいずれの道をとって発展したかの判断は現在ではきわめて困難だが、おそらく第1の道の可能性のほうが強かったと考えられる。その証拠は18世紀末までの商工業の発達状況、資本の原始的蓄積過程をみればよい。当時の旅行者、官吏などの残した古文書からみて、15~16世紀には中世の被支配層カストの内からかなり幅広い middle class が生まれ、17世紀初めにはかれらが内外商業の主導権を握っていたからだ。

(4) だが、カスト的社会規制は、あまりにも強くインド社会にビルト・インされていた。イギリス侵入までの間に、進歩的商工業カストは都市で形成されたにとどまり、農村の圧倒的部分は依然として古い保守的な共同体規制にしばられ、持続的かつ自立的な資本主義発展の極樁となっていた。西欧勢力の侵入とともに、従来から存在していた問屋制的商人層が急速に勢力を拡大する。農村のカスト制崩壊のためには、資本主義発展の第1の道が軌道にのるためには、あまりにも時が短かすぎたのである。

(5) 18世紀央のイギリス資本主義によるインド支配は、インドの資本主義発展にとって一大転機となった。従来の発展タイプは徹底的に破壊された。18世紀後半の

イギリス重商主義貿易政策を反映して、インド貿易は無差別な収奪と極端な不等価交換を旨とした。その保障手段として、イギリスは banyans, gomastas というインド人エイジェントを手下に従属させ、かれらはまた、買弁的商業資本家として広範な手工業者層を社会的・経済的に支配し、後者を没落させた。進歩的的家内工業は封建的に再編された。

一方、農村では、ある地域はムガル時代の徴税機構を封建的に再編したザミンダーリー制を敷くとともに、他の地域はライヤットワリー制を採用したが、ここでも土地の私有化・集中化を通じて、前者より緩慢ながらも同様に、支配層＝被支配層間に封建的諸関係が復活する。と同時に、全農村地域にわたって、支配層の間には土地と生産物の商品化が進行する。

(6) 19世紀初頭以降、イギリスの産業資本主義への移行に則応して、そのインド支配体制も変化する。インドはイギリス資本主義の原料供給＝製品販売市場に再編される。関税政策が最大限に利用され、土着工業は徹底的に差別され破壊される。都市は再建されるものの、それは生産活動の中心地としてではなく商業活動の拠点としてである。

この時代に Managing Agency System が生まれる。MA は最初、イギリスの商業、金融資本の必要上から商業・金融部門に現われるが、19世紀30年代以降には生産的部門にも導入される。イギリス資本それ自体の集中・集積化のほか、MA を通ずる支配によって、経済支配権はますます少数のイギリス資本家の手に集中する。インドはより深く世界資本主義体制に組みこまれてゆく。

また、イギリス資本はザミンダーなど農村の封建的勢力との結合を深め、後者の力をテコとして、よりいっそう全インドに対する支配力を強めていく。

(7) しかし、19世紀中葉以降、インド資本家はイギリス資本に従属しながら復活を始める。イギリス資本に従属した、その下請け的商業従事者の内から資本を集積するインド人が現われる。契機は戦争（とくに、アメリカの南北戦争）とアヘンの密貿易（対中国）であった。かれらの系譜は——パルシー、グジャラティー、マルワリ、ベンガリなどのそれ——いずれもイギリス資本に従属した商人・金貸し業者などの成り上がり者だ。商人が小生産者を従属させながら、上から資本主義の発展をおし進めてゆく道、マルクスのいう「資本主義発展の第2の道」がインドに開かれる。

農村では、食糧用作物生産が停滞する反面、換金作物

の導入、土地私有化による商品経済の浸透過程で、地主・農業資本家の封建的支配下で生産に従事するミゼラブルな小農民層と農業プロレタリアートとが大量に析出される。

(8) かくてインドは、19世紀末以降、イギリス金融資本の支配下に完全に組み込まれ、その一環としてのみ機能する。インド独自の発展はまったく抑えられる。インド資本主義はイギリス資本主義の忠実な目下の同盟者として限られた範囲でのみ発展を許される。

(9) 1947年の独立は、イギリスの直接的政治支配の終末を意味したものの、インドの経済構造を基本的に変更するものではなかった。

独立インド経済発展の基本方針は1944年のボンベイ・プラン——別名、タタ＝ビルラ・プラン——によって決定された。その性格は、世界資本主義体制の新段階とインド資本主義の歴史的発展過程に則応して、国家資本の基幹産業への介入をテコとしてインドに資本主義発展の道を切り開こうとするところにある。1948年の産業政策決議は、このプランを継承し発展させたものである。

第1次5カ年計画開始までの数年間に、資本集中は進行したが、大幅な所得格差と膨大な失業の存在も続いた。外資は伝統的産業から若干引き上げられたものの重化学工業向け流入が増加し、イギリス資本に代わってアメリカ資本の進出が目立ち始める。第1次5カ年計画は、この延長として始まる。計画は、適正補償による農村中間寄生階級の法的否認、農村の社会関係近代化を重点の一つとする。しかし、この改革は法的側面にとどまり、実態は旧来のままであった。商業農への傾斜が強まったため、多くの農民はさらに窮乏化する。金融面では、国家金融による民間資本育成策としていくつかの国家金融機関が設立され充実された。

(10) 1956年にふたたび産業政策決議が可決された。第2次計画以降は、重化学工業により相対的に重点がおかれるものの政策目標は変わらなかったし、MAも56年の改正会社法によって生命をながらえた。資本集中はさらに加速化する。public sector のシェアはふえるが、それは public sector の拡大を通じてインド資本主義発展の下部構造を補強する以外のなにものでもない。農村でも Community Development Project は農業の商業化と一部富農・農村商人への富の集中化を助長する以外のなにものでもない。開発計画投資の外資依存率は計画を重ねるごとに上昇しつつある。

まことに5カ年計画は、インド資本主義の、インド資

本主義による、インド資本主義のための経済政策にほかならない。

### III

以上が全6章、A5版で400ページ以上にのぼるかなり部厚い著書の大要である。引用箇所は全体で延べ1000カ所以上にのぼる。引用書の種類も多く、広範に文献を渉猟した点は賞賛してよからう。だが、その引用はインド人の通弊としてあまりにも長ったらしく、主題から離れた部分も見受けられる。つまり、必要にして十分な叙述が適切にコンパクトされていないうらみがある。これを適当に整理すれば、おそらく著書の分量は4分の1以下に圧縮できるのではないかと思われるほどだ。それでいて、肝心のポイントが説明不足である。

この点を四つばかり指摘してみたい。

第1は、15～16世紀に出現した karkhanas の——とくに進歩的なその——生産様式と生産関係の分析が不十分なことである。インド各地の都市で数多くの手工業者が精緻な綿織物、絹織物を karkhanas で生産したことは明らかにされた。しかし、karkhanas の生産形態がマルクスが『資本論』第1部第11～12章で分析した同業者組合の作業場であったのか、初期マニュファクチュアであったのか、すなわち、手工業者集団の単なる協業であったのか、あるいは初源のマニュであったのか、を必ずしも納得できるように説明していない。たとえば、当時のダッカで生産された高級モスリンは中世的職人層の生産物であったとするきわめて有力な見方もあるからである。これは、インドでも16世紀に第1の道による資本主義発展の萌芽が現われたとのシェーマの理由づけをあいまいにする。

第2は、第1点と関連するが、西欧社会の移行タイプをモデルとして第1の道か、あるいは第2の道かを論ずる場合——そのこと自体の内にも問題があるように思われるが、それはさておき——インドの特殊な社会経済構造をどのようにとらえたのか。これを都市についてみると、14世紀以降に発生してきた都市を西欧社会になぞらえていけば、「中世の頂点としての自治都市」としてとらえたのか、あるいは農奴制廃止に伴って「地方に発生した農村都市」としてとらえたのか、の区別が明確でない。このためには、インドの綿織物工業、絹織物工業がイングランド西北部の毛織物工業と、社会経済的に同等の意義をもつかどうかを吟味しなければならないであろう。この解明には、当時の国内市場がインドとイングラ

ンドでそれぞれどうなっていたか。その同質性と異質性とを明らかにしなければならない。これはつぎの問題点、すなわち、農民層分解過程の分析に関連してくる。

第3は、農民層分解過程——それがあったとして——の分析の欠如だ。古代から続いた農民のインド的村落共同体生活は、15～19世紀の間に——それに先立つ2～3世紀までを含めて——質的にどう変わり、どの点が変わらなかったのか。もし変わった点があるとすれば、それは農民層がどのように分解した結果なのか。この過程を分析すると同時に、15～16世紀：第1の移行パターン of 萌芽発生、18世紀末：イギリスの強力なその圧殺、19世紀後半：上からの第2の移行パターンによる資本主義の発展、というシェーマを成立させるためには、前半と後半における相違を明確にしなければならない。本書は、前半における農民層分解について語るところがほとんどない。ただ、非支配的カストの内から middle class が出現したとの指摘にとどまる。後半期においても、一部地域に生じた商業農の発達、全インド的な土地の私有化・商品化の指摘にとどまり、村落共同体規制の下にあった農民がその内部で具体的にどのような変化を受けたかを明らかにしていない。西欧モデルに則していれば、19世紀の農村の封建的再編成が、たとえば近世の東プロイセンでみられた「いわゆる再版農奴制」とどこが同じでどこが違うのか、を分析しなければならないであろう。これら一連の分析が不十分なため、なぜ第1のパターンがイギリス侵入によって中絶したか、そしてなぜ19世紀中葉以降、ゆがめられた型で第2のパターンが現われるのかが明確に証明されていないように思われる。

第4は、独立後のインド経済の性格規定である。独立インドの経済が資本主義であることは明らかだが、独立を転機に支配層内部の関係はどう変化したのか。そしてかれらの労働者、農民および小市民層に対する関係いかん。独立の前後において、インド経済の性格は基本的に変わらなかったとしながらも、独立前における外国資本支配強調の反動として、逆に、独立後における外国資本の役割を相対的に軽視したことは、事態の真の姿の把握を不十分にしているように思われる。

ともあれ、かれの処女作ともいふべき本書は、いくつかの大きな欠陥をもちながらも、インド資本主義発展の過程と現状と方向をかなり明確にかつ大胆に描きだしている。よりいっそうの研究を期待したい。

(海外派遣員 新名政英)

—— 在ニューデリー ——